



TITLE:

經濟本質論(二)

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 經濟本質論(二). 經濟論叢 1933, 37(6): 790-811

ISSUE DATE:

1933-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130384>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第六號

第三十七卷

昭和八年十二月一日發行

論叢

所得稅改造の一案……………法學博士神戸正雄

企業と所得稅負擔……………經濟學博士沙見三郎

經濟本質論……………經濟學博士石川興二

時論

小賣更生策としての自由連鎖店……………經濟學博士谷口吉彦

研究

投機と取引所……………經濟學士今西庄次郎

アリストテレスの價值論……………經濟學士白杉庄一郎

アングロ時代の社會單位について……………經濟學士竹中靖一

說苑

マールの利子論……………經濟學士青山秀夫

一般均衡論と交換方程式……………經濟學士柴田敬

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第三十七卷總目錄

經濟本質論 (二)

石川 興 二

三 富の本質の人間學的考察

以上に於て富の本質的諸特徴を學史的に考察したるが故に、次にこれを人間學的に考察し以て人間の經濟的本質を明にすると共に富の本質を一層明確にしなければならない。

富は物的使用價值と物的勞働價值とをその契機として居る。故に先づこの物的使用價值を人間學的に考察しよう。而してこれが爲めに先づ明にされなければならぬことは、人間なるものは、心的、物的、生命統一體、*die psycho-physische Lebewesenheit* なることである。

既にアリストテレスは次の如くに云ふて居る。「心はその中に生命の能力を有するところの自然體の形相の意味に於て本體である。形相としての本體はエンテレヒーである。故に心は特定の肉體のエンテレヒーである」¹⁾。かくてアリストテレスに於ては、心と肉體とは一つの生命體に於ける形相と素材の關係に於て把握されたのである。而して人間の本質は人間の精神にあるのであるが、而もこの精神は肉體なしには存在し得ない。而も肉體の存在には、必ず外的の物質が必要である。

1) 本誌 第三十七卷第一號
2) Dilthey, Einleitung, S. 6.
3) Aristoteles, De Anima. S. 412 a.

かくて人間の存在に對して物質が缺く可らざるものとなるのである。

加之人間の存在がかくの如く心的物的生命統一體なるが故に、その活動にとつても亦必ず物質が必要である。先づ人間なるものは環境に制約されながら而もまたこの環境に働きかへすところの實踐的存在である。即ち人間は身體を通じて外界の對象を認識しその價值を批判しこれに基いて外界の對象に對する目的を立てこの目的を實現する方策を定め、然る後身體を通じて外界に働きかけてその目的を實現する。而して人と自然との間の交渉のみならず人と人との間の精神的交渉もまたかくの如く身體を通じてのみなされ得る。即ち既に述べたるが如く自己の内的な生命 *Leben* は「感覺には觸れ得ないで只だ體驗し得られるのみもの *das den Sinnen Unzuzängliche nur Erlebbare*」であるがそれが身體を通じて感性界に表現 *Ausdruck* される。他の人はこの外的なる感性的表現を通じてこの内的なる生命を理解 *Verstehen* する。他人のみならず自分自身も自己の生命の外的表現を通じてはじめて自己の生命を十分に理解し得る。かく内的の生命が身體を通じて自己の生命を外的に表現するに當つては物質が必要である。即ちその表現が自己の身體による言語行動である場合に於てもこの表現は更に外的の物質を通じて把握され得る。例へば口の動きは言語となり空氣なる外界の物質を媒介として耳に入り理解される。更に進んで人間は自己の生命の表現を外界の物質に固定する必要が起る。即ち空間的又は時間的に隔る人々に自己の生傳へんとする時には、これを例へば文字として外界の物質に止めなくてはならぬ。また造形命を

藝術に於てはこれを外界の物質に表現しなければならぬ。かくてその各が心的物的生命統一體であるところの人間と人間との交渉に於ては表現手段として物質が必要なのである。而してこの物質は單に表現手段たるに止まらない。文化的生命は物質に自身を表現することによつてのみはじめて完成する。例へば學問的生命はそれが文字となつて外界の物質に表現されることによつて自己の發展を果げる。また藝術的生命は自己を外界の物質に彫まざるを得ない。

かくて人間は心的物的生命統一體なるが故に、自己の存在にとつても自然との交渉に於ても、人間との交渉に於てもまた文化的生命の發展完成に於ても必ず外界の物質を必要とするのである。

これに反して若し人間が純精神的存在であつたならば、その存在にも活動にも物質なるものは何等必要ではないのである。デイルタイは次の如くに云ふて居る。「純粹精神的人間 *das rein geistige Wesen* をかゝるものからのみ成り立つて居る人格世界に於て考へて見るならばその出現存續、發展並に消滅は精神的種類の諸條件に結びつけられて居るであらう。其等のものの健在は精神世界に對するそれ等のものの地位に於て基礎付けられて居るであらう、それ等の相互の結び、互への行動は純粹精神的手段によつて果げられ而して其行爲の持續的結果は純粹精神的性質のものであらう、人格の世界からのそれ等のものの退行すらも精神的なるものにその根據を有するであらう」¹⁾然るに事實人間なる精神的存在はかくの如き純粹精神的存在ではなくして心的物的生命統一體なるが故にこれ等一切の場合に於て身體を土臺とし従つてまた外的物質に依存して居るの

1) Dilthey, Einleitung S. 14.

である。

富の本質的契機たる物的使用價值なるものは即ちかくの如き人間生活の物質的必要に役立つところのものである。かくて經濟的使用價值は人間生活の爲め的手段價值である。而してこれを一言にして云ふならば經濟的使用價值なるものは富なる物が物として人間生活に役立つ屬性である。而してこの物が物として人生生活に役立つ性質には二種ある。一つは人間の生存に役立つ性質である、これを單純なる經濟財について云へば例へば米が富なる所以はそれが物として人間の生活に役立つ性質を有するが故である。次に文化財なるものもそれが物として人間生活に役立つ點より見ればそれは經濟上の富である。即ち文化財に於いては二種の價值が區別し得られ而も兩者は云はゞ一つの生命體に於ける精神と身體との關係にある。一つはそこに表現されてゐる精神的價值そのものであり、他はこの精神的價值を表現し居る物的手段としての無價值である。例へば畫面又は書物は藝術的價值又は學問的價值なる精神的價值を表現して居る物的手段である。人々はこの物的手段によつてこれ等精神的價值に近づき得るのである。故に若し一つの文化財を失ふならばそれによつて精神的價值に近づくことが出来なくなる。かくて要するに經濟的使用價值とは物が物として人間生活に役立つ性質である。文化財はかゝる物的手段としては經濟的使用價值である。

かくの如く經濟的使用價值なるものは、物が物として人間の生活に役立つ屬性であるが故に、

物そのものに屬する客觀的性質であつて、この客觀的性質を人間が利用することによつてこの物より享けるところの用即ち效用と區別されねばならない。即ち一定の使用價值を有するものもその利用の仕方の如何によつて異なる量並に質の效用を發揮する。例へば今日政府の倉庫の中にある數百萬石の米はそれ自身としては一定の使用價值即ち人間生活に役立つ屬性を有して居るのであるが、それは何等效用を發揮せずして鼠や蟲のついでに任かされて居るのである。

この客觀的なる使用價值と主觀的なる效用とは今日に於ては屢々混同されて居るのであるが、これは限界效用學說の影響によるものであつて、それ以前の秀れた經濟學者に於ては例へばアリストテレス、アダム・スミス、マルクス等に於ては使用價值なるものは物自體に屬する性質として客觀的意味に於て用ひられて居る。即ち有用價值は物の屬性であり富の物材的内容であつて、この價值は使用に於て實現される。而して客觀的使用價值がかく實現されたところのものが主觀的な效用のである。即ち潛在態 *potency* に於て使用價值なるものが顯現態 *actuality* に於ては效用である。

かくの如く經濟的使用價值とこの價值の享受と云ふことは區別されなければならないのであるが、而も經濟的使用價值が物質的使用價值であり従つてこの價值は本質上絶對的に有限的なるものなるが故にこの物價值の享受としての經濟的享受の本質は物的排他的なものである。即ち例へば自身が食へるところの一碗の飯は自分が享るのであつて他人は同時にこれを享けることが出來

- 1) アリストテレスは使用價值は「物自體に屬するものである」と云ふて居る。Aristotle; *politica*. p. 1257a
- 2) スミスもアリストテレスの意を受けて居る。Wealth of Nations. p. 30.
- 3) マルクスも明にこのことを述べてゐる。Kapital. S. 4.

ない。それは他人が食へるか自分が食へるか何れかである。また自分が着て居るところの衣についても同様である。これに反して精神的価値であるところのもの例へば學問的真理又は藝術的価値はその精神的本質上無限の価値であつて幾人の人々が幾度これを享受しても盡きることがない。従つてこの価値の享受は本質上決して排他的なるものではなく萬人に共通的博愛的なものである。只だこの精神的文化価値が物的に表現されて居る時はこの表現手段の享受について排他性が伴ふ。例へば一冊の書物についてそこにあらはれて居る精神的価値自身は精神的無限なものであるがこの精神的価値を表現して居る物的手段としての価値は經濟的使用価値である。従つてその享受も亦排他的獨占的となる。

以上に於ては富の本質的契機の一たる使用価値を人間學的に考察し以てこの面に於ける人間の經濟的本質を明にしたが故に次には同じく富の本質的契機を爲すところの勞働価値について考察しなければならぬ。

既に明にせし如く人間生活には必ず物的使用価値を必要とする。然るに自然のまゝなる物質にしてこの必要を充すものは極めて少なく、その多くは人間の勞働を以て生産されねばならない。この物的使用価値を生産するところの勞働が即ち經濟的勞働である。故に經濟的勞働は文化財を生産する精神的勞働とは異なつて筋肉的勞働が主となる。勿論經濟的勞働と雖へども人間の勞働である以上無自覺的本能的なものではなく意識されたる目的を實現する自覺的活動である。また

精神的勞働と云へども文化的生命の表現が肉體を通して外界の物質の上になされるものである以上、筋肉勞働をも伴はねばならぬことは勿論である。然しながら經濟的勞働は物が物として人間生活に役立つ性質であるところの物的使用價值を生産するのであり精神的勞働の眼目とするところは精神的價值であつて物質は只だこれが表現手段たるにすぎないのである。

今この精神的勞働と經濟的勞働との區別を更に明にせんに、學者が著作をなすと云ふことは文化勞働であるが、かくして著作されたるところのものを印刷製本にするところの勞働は經濟的勞働である。即ち前者に於ては學問的價值の生産が目的であつて物的表現物はその手段である。然るに後者にあつては、學問的價值を創造するのではなく、この學問的價值を表現する物的手段としての書籍を生産するのである。同様にして活動寫眞を創作することは文化的勞働であるが、かくてして作られたる寫眞を復寫するところの機械的勞働は經濟的勞働たるに過ぎない。かくて文化的勞働に於ては精神的勞働が主であつて筋肉の勞働が従であるが、經濟的勞働に於ては筋肉の勞働が主となり精神的勞働が従となるのである。

かくて文化的勞働に於ては人間は精神的能力を活動せしめて精神的價值を創造するのみならずまたこの文化價值を創造しながら享受し以て精神的能力を發展せしめる。これに反して經濟的活動に於ては筋肉の勞働が主であるが故に肉體が疲勞するのみならず、その生産するところは物的手段的價值なるが故に、文化價值の創造に於けるが如くこれを創造しながら享受すると云ふこ

とは出来ない。従つてその結果は心身の著しき疲勞となるのである。かくてまた文化的勞働に用ふる時間は人間の精神的活動としてそれ自身最も意義ある人間の生活の時間であるが、經濟的勞働の時間は眞の人間生活に對する犠牲の時間である。即ち各人の一日は二十四時間であつてその中一定の時間は心身の休養の爲めに用ゐられねばならぬのであつて、その殘の時間が人間の生活の爲めに用ゐる得る時間であるが、この中經濟的勞働に用ひられる時間が大である程人間の生活に用ゐられる時間は小となり人間の生活の内容は貧弱とならざるを得ないのである。かくる意味に於て經濟的勞働はそれ自身としては身體並に精神の精力の犠牲でありまた時間の犠牲である。それ故にスミスは次の如くに述べて居る。

「同量の勞働は總ての時總ての場所に於て勞働者にとつて同一の價值 (equal value to the labour) なりと云ひ得る。即ち健康體力並に精神の状態普通にして就練及び技巧亦普通なる場合に於ては其勞働者は同一の勞働にして常に同一量の安樂と自由と幸福とを犠牲にせざる可らず he must always lay down the same portion of his ease his liberty, and his happiness。」と云ふて居る。即ち經濟的勞働はかくの如き意味に於て人間生活の犠牲である。かくて經濟的勞働は文化的勞働とは異なり犠牲勞働でありこの犠牲勞働の體化物としての富に於ける勞働價值は犠牲價值であることとなる。

かくの如くにして富なるものはその積極的なる有用價值に於てのみならずまた消極的なる犠牲

價値に於ても重んぜられねばならない。これ富の具體的な尊重である。この點についてキヤナンが富の概念について次の如くに云ふて居ることは興味あることである。即ち十八世紀の初期より始まりし文學及政治上に於ける民主的傾向は積極的の效用又は充足の作出に伴ふ苦痛及び困難を考慮に入るゝに致らしめた。即ちアダム・スミス以前の多くの經濟學者は、又其後に於ても或る者は、國民の利益を考ふるに勞働者階級の利益を除外したのである。然るに生産に伴ふ苦痛なるものは此階級に主として落ちるのであるから、此等の經濟學者は富の獲得に伴ふ苦痛を全く考慮に入れなかつたのである。と述べて居る。¹⁾

かくて富なるものは物的、有限的なる使用價値と物的、犠牲的なる勞働價値との統一であり、而して人間の經濟生活の本質はこの物的使用價値の排他的獨占的享受とその犠牲的生產勞働に於て存するのである。

四 經濟的文化域の本質

以上に於ては富の本質とこれとの關聯に於て人間の經濟生活の本質を明にしたのである。故に今や進んで經濟的文化域自體の本質を明にしなければならぬ。歴史的社會的實在には各種の文化域が存するのであるが各種の文化域に於ては各々特有の價値が生産され且つ享受されて居る。この各の文化域の本質はそれに特有なる價値の本質より明にされ得るのである。而して既に明に

1) 本誌第十卷第一號拙稿「キヤナンの富の概念に就て」参照

したが如く富は物的價值なるが故にこれを生産する人間の經濟的勞働の本質は物的犧牲的勞働でありまたこれを消費する人間の經濟的享受の本質は物的獨占的享受である。このことより進んで經濟的文化域の本質が明にされ得るのである。

即ち經濟的勞働は精神的價值を生産する文化的勞働とは反對に物的價值を生産するものとして犧牲的なものなるが故に人間はその本質上學問の研究藝術の作製等の文化的生産的勞働に従事することを好むに反して、經濟的價值の生産的勞働に従事することを避けんとする。

また精神的價值はその本質上無限なるものであるが故に幾多の人々が汲めども盡せざるものであり従つて人々はその享受を本質上共同的になさんとするのであるに反し經濟的價值は本質上物的有限的なものであり、従つて人々はその享受を本質上排他的獨占的ななさんとする。

かくて社會に於ける人々の間に於て何等かの原因により優者と弱者との別の存する限り、經濟的勞働はその本質上弱者の方に押しやられ而して經濟的享受はその本質上強者の方に偏することとなる。これ、富の物質的價值性より當然に發し來るところの經濟的文化域の階級的分裂の本質である。即ち經濟的文化域に於てはその價值の享受と生産的勞働とが本質上異なる階級の人々の間に分裂せんとするのである。これに反して精神的文化生活に於てはその價值の精神的本質上その生産的勞働と享受とのかくの如き分裂性はありませんのである。かくてこの階級的分裂性なるものは經濟價值の物質性より必然に生じ來るところの經濟的文化域の本質的社會惡であると云ふ

ことが出来る。而して今日の社會問題の根柢をなせるところのものは實にこの質本的社會惡なのである。

かくの如く階級的分裂性が經濟的文化域の本質であるが故に人間の歴史に於ては既に原始共同體なるものに於てもこの傾向は見られるのである。而もその社會を統一して居る共同的意志が衰へない限りこの分裂的本質は自己を奔放に實現することは出来なかつた。然しながら近世に入つて宗教其他の精神生活の自由と同様に經濟的自由が叫ばれ經濟的生活域に對する國家意志の干涉が意識的に排除せられるやこの本質は自由奔放に實現せられて行つた。かくて今日見られるが如き經濟的勞働者階級と消費者階級との階級的分裂が成立したのである。然るに同じく國家的意志の束縛より放たれた他の精神的文化域に於ては何等かくの如き意味の階級的分裂は見られないのである。かくて經濟的自由 economic free dom と云ふことは、他の精神的文化域の自由と云ふこととその本質を異にしたのである。即ち精神的文化域に於てはそこに自由があるならばその價值の生産者の間に競争が十分に行はれ相互に刺激し合ひ偉大なる價值が創造されるに至る。この偉大なる價值は他の人々もこれを享受してその生産的能力を高めることとなる。例へば偉大なる學問的價值の生産は他の人々の學問的能力をも高め、かくて人々はより高き社會的水準に立つてより進んだ價值の創造に向ひ得るのである。經濟的生産に於てもその生産力が科學的智識又は技術的智識等人間の精神的能力にかゝはるかぎり生産力は進歩したのであるが、而もこの進歩せる生

産力の生産したところの富は社會の強者の方へ偏して行つた。またこの高まれる生産力は經濟的勞働の犠牲を減少するよりもむしろ其犠牲を愈々劣弱者の方へ轉嫁せんとしたのである。機械の明が婦女子幼年者を經濟的勞働の負擔者たらしめ國家意志が出てこれを防衛しなければならなかつたところのものが即ち工場立法の發端であつた。

この經濟的文化域に於ける分裂對立の進展の最も顯著なる物的表現は「富」の「商品」への轉化であつた。即ち富なるものは前述せし如く物的勞働價值と物的使用價值との統一であるが本來はその勞働價值の勞働の主體とその使用價值の使用の主體とは、恰も今日の家庭の經濟生活に於て見られるが如く、大體に於て分離しては居なかつたのである。然るに商品なるものに至つては、それに具體化されて居るところの勞働價值の勞働の主體と使用價值の使用の主體とは全く異なるのである。即ち商品の生産に於てはその生産的勞働は他人の使用すべき使用價值を生産するのである。而も資本主義的生産社會に至ればこの異なる主體の間には當然に階級的對立がある。即ち社會の全體としての商品の生産的勞働の負擔者は無産者階級であるが、かくて生産せられる使用價值の多くは有産者階級によつて使用されるのである。かくて我々は商品に於て經濟生活の本質としての階級的對立の物的表現を見るのである。

更に我々は商品に於て人間生活と經濟生活との逆轉の物的表現を見る。即ち本來富の使用價值なるものは人間生活に對する手段價值であり従つて家庭の經濟に於けるが如く人間生活の必要の

爲めに直接生産されるものであるが、商品は直接には交換價值の爲めに換言せばそれと換へらるべき貨幣量の大ならんが爲めに生産せられるのである。而してそこに作出せらるべき使用價值なるものはこの交換價值實現の手段としてのみ考察に入れられる。かくて商品に於ては交換價值な經濟的價值が人間生活に役立つべき使用價值なるもの以上に考へられて居るのであるが、この純とは經濟的自由が奔放に實現せられし結果人間生活の手段生活たるべき經濟生活がむしろ人間生活の目的となつて居るところの現代社會の構造を物體に表現してゐるのである。

社會主義は生産手段が私有されて居るが故に經濟社會が階級的に分裂對立して居るのであつて將來社會に於て生産手段が共有されるならば階級對立は無くなると云ふた。このことは正しいであらうか。今日の露西亞は原則的には私有が廢せられて居るのである。而もその社會に於て一國一黨を形成して居る共產黨員がその社會に於ける強者である以上これらの人々が經濟的勞働を避け政治其他の精神的勞働に趨き經濟的勞働をその社會の弱者に負擔せしむるに至るべきは當然でなからうか。かくて經濟的文化域なるものはこれを眞に強き國民意識の統制の下に置かざる以上、その本質上當然的に利己的な分裂を生ぜざるを得ない。従つて經濟的社會問題は絶へ得ない。

かくて他の精神的文化域は本質上自由に放任さるべきところのものであるに反し經濟的文化域は本質上統制せらるべきところのものである。近世に於ける自由主義は、總ての文化域に對して一樣に自由を求めたのであつて精神的價值の文化域に於ける自由と物的價值の文化域たる經濟的

文化域に於ける自由との本質的意義の相違を十分に自覺して居なかつたのである。かくて精神的文化域に於ける自由はその精神的價值の創造と享受との進歩を齎したのであるが、經濟的文化域に於ける自由は經濟的價值の生産と消費との發展を伴ひながら而もこの進歩せる消費の主體と生産的勞働の擔當者との分裂對立を著しく進歩せしめた。加之かくして社會の人々の經濟的關心は著しく強められ總ての文化域がこの經濟文化域に壓迫されて物化せられ十分なる發達を果げ得ざるに至つたのである。こゝに現代社會問題の意義が存する。この個人主義自由主義に對立して今日旺盛となりつゝあるファシズムなるものは正にこれと反對の誤を冒しつゝある。即ちそれは一切の文化域の自由を否定せんとするものである。これ等相對立せる諸主義の眞の統一としての國民主義の立場に於ては經濟的文化域を國民的意識の強き統制の下に收め以て精神的諸文化域の眞の自由なる發展を計らなければならないのである。

五 富並に經濟的文化域の發展の構造

以上に於て富の物質的本質より發し人間の經濟生活の本質を明にし更に經濟的文化域の階級的分裂の本質を明にした私は、今これを總括して經濟的文化域の發展の構造を一言しよう。

經濟的文化域の本質は既に述べたが如く階級的分裂的である。故にそれ自體としての發展の構造は益々階級的分裂的となることである。即ちそれはそれ自體として辨證法的發展を示めすもの

ではない。マルクス史觀は經濟的文化域それ自身による發展を辨證法的とする點に於ても批判されるべきである。¹⁾

然しながら經濟的文化域なるものは決してそれ自體として存在するものではなく之れは結局國民社會の内に於てであるのである。而してその國家意志との辨證法的關係によつてそれ自身もまた辨證法的に發展するのである。即ち自然共同體に發せる經濟的文化域は中世までは未だ國家意志と分裂するに至らなかつたのである。か近世に入つて次第に分裂しそれ自身の本性としての階級的分裂性を次第に徹底せしめた。而して今日はこの階級分裂をこれ以上進めることは國民社會全體の存立にかゝはるまでに至つたのである。かくて國家意志は今日の個人主義的分裂的な經濟的文化域を國民的共同意識の強き統制の下に導いて行かなければならないのである。而してこの國民的共同意識の統制の下に立てる經濟的基礎の上に諸種の精神的文化域自體の自由が保持せられその自由なる發展の果げられることが將來社會の理想である。この意味に於て經濟的文化域の正常的發展は辨證法的である。²⁾

即ち生の正常的發展の構造は辨證法的であるが、これをヘーゲルの語を以て云ふならば *sich* の狀態より *für sich* の狀態へ而して更に *an und für sich* の狀態へ至る發展である。即ち *sich* の狀態に於て、未分の狀態にあるところのそのものゝ契機が分裂立對することによつて *für sich* の狀態に進み、この分裂對立したところの契機が再び統一することによつて *an und für sich* の

1) マルクスは經濟的文化域を歴史の眞實の基礎 *die reale Basis* として考へる。類は歴史を階級闘争の歴史としたが而もこれを徹底することにより階級なき而して國家なき社會に至ると考へた。
2) 本誌第三十七卷第四號抽稿『市民主義、國家主義、國民主義』

狀態に發展するのである。即ち合、蓄、的、全、體なるものが分化して解、明、的、分、部、的となり更にこれが統一して解、明、的、總、體となることであると云ふことも出来る。國民社會は全體としてかくの如き辨證法的發展をなすのである。

かくてこれを「富」の形態について云ふならばそれは「自然共同的の富」より「商品」に轉化し而して更に「國民共同的富」に辨證法的に發展して行くのである。而もこの發展を通じて富は物的勞働價值と物的使用價值との統一としてのその本質を保持して居る。即ちこれ等の富の諸形態、はこの同一の富の本質の異なる社會に於ける存在形態である。かくてこの富の辨證法的なる發展はその基礎に於ける經濟的文化域の辨證法的發展の構造を物的に表現せるものであると云ふことが出来る。而してこの經濟的文化域の辨證法的發展の土臺には經濟生活の根柢をなす經濟的勞働と經濟的必要の辨證法的發展がある。

先づ自然共同體に於ては恰も今日の家庭經濟に於けるが如くその共同意識が共同的必要の爲めに共同的勞働によつて共同的の富を生産し消費したのである。故にそこに於ては生産と消費とか未分前の狀態に於て共同意識の下に直接に結ばつて居たのである。

この自然社會に於ける人々の經濟的必要は自然的な欲求に發するものであつて、この自然的欲求は動物のそれを去ること餘り遠からざる極めて單なものである。この狀態に於ては人間精神は未だ自然の中に眠むつてゐる。この精神が次第に醒めて來るにつれ次第に種々なる欲求が分化發

展し來るにと共にまたこの各人の欲求並にその充足が互に社會的に影響し合ふてその間に社會的
一様性が發達して來る。¹⁾ かくて各人の諸種の欲求の各々は相寄つて諸種の社會的欲求の圈を構成
するに至る。例へば一様な布又は食物に對する社會的欲求の圈が構成される。かくて諸種の同
一類の使用價值に對する欲求が發達して來るにつれて本來の共同體内部の單純な共同的分勞も次
第に分化發展して行く。かくて次第に各人は特定種類の使用價值の生産を以て専ら自己の業務と
するに至る。これ即ち個人的分業の發達である。かくて「分業一度完全に確立さるゝ時は、各人
が自己勞働の生産物に依りて充す所は、僅に其欲望の極小部分に過ぎず。各人は自己勞働の生産
物中、自己の消費する以外の餘剰生産物を以て他人の生産物中の自己の要する部分と交換し、以
て自己の欲望の極めて大なる部分を充すの常なり。斯くて各人は何れも交換することに依つて生
活し、何れも或程度の商人となると共に社會自身もまた所謂商業社會なるものとなる。」²⁾ これ即ち
市民社會である。

かくてこの社會に於ては一方個々人の需要の總和が社會的需要をなし他方各生産者の個人的供
給の總和が社會的供給を構成しこの兩者の關係によつて定まる價格なるものを目安として生産並
に消費が支配されて行く。故に消費者相互の意識も結ばれて居らずまた生産者相互の意識も結ば
れて居らずましてや消費の意識と生産の意識は何等結ばれて居らない。それ等の人と人との關係
の總ては貨幣を媒介として自然發生的偶然的關係に於かれて居る。かゝる社會に於て富は「商品」

1) Heyel, Rechtsphilosophie. I § 192 以下
2) Smith, Weath of Nations. p. 24.

の形態をとる。即ち商品なるものはかゝる分業的生産社會に於ける獨立的なそして相互に無關係な私的勞働が交換價值の爲めに生産するところのものである。この偶然的關係はこの商品生産社會が更に發展し、生産者自體の中に資本家階級と勞働者階級との分裂が發展し従つて消費者の間危有産者と無産者との對立が發展し來るならば愈々激しくなる。而して國民社會全體の存立はに險に曝されるに至るのである。

而もこの分化發展せる市民社會に於ては他面分業並に機械の發展によつて社會全體の經濟的生產力が著しく高まつたのであるが、そこには共同的意識が缺如して居るが故にこの生産力を眞に國民全體の爲めに用ゐる得なかつたのである。

かくて今や國民的同意識の強き自覺の下にこの分化發達せる而も意識的統一を失へる經濟的文化域を收め、個々人の支配して居る生産力を統一して國民的生產力を結成しまた個人化し而も社會化した欲求を眞の國民生活の立場より統一して國民的必要を確立し兩者を直接に意識的に統一して國民共同體の基礎としての經濟的文化域を確立しなければならない。かくて生産せられるところのものは國民的勞働價值と國民的使用價值との統一としての國民的共同的富である。

六 富の並に經濟的文化域の空間性的本質

富が自然的共同的富より商品へ而して更に國民的共同的富へ進んで行くのは、云はゞ富の時間

的發展的な形態である。こゝに富の本質に關する空間性的差別が、更に考察されねばならない。而もこれはこの富の時間的發展を貫くところの従つて經濟的文化域の發展を貫くところの二種の根本的區別があつて、ことに現代市民社會の國民共同體への進展の考察にとつて重要なものである。

それは工業的生産物としての富と農業的生産物としての富の區別である。即ち工業生産物は死物であるが農業生産物は生物である。かく生産物の本質が死物であると生物とであるによつて、その生産労働の本質は異なる。即ち死物はその構造を物理的に分析することもまた機械的に構成することも出来る。従つてこれを生産する労働程過はこれを分析し構成することが出来る。これ即ち分業である。生産労働がかく分解せられるならばその生産道具もまた同様に單純に分化する。かく分化發展せし道具がやがて統一にもたらされたる時之れは機械となる。工業的生産は今や機械を用ゐることによつてその生産力を著しく増大する。かくて工業的生産は分析的機械的でありそこに働く人間的能力は分析的理智的となる。この理智はヘーゲルの所謂悟性 *Verstand* であつて物を分析し區別する智力である。而してこゝに於ては人間は自然を征服し行く自己の労働の力を最も顯著に體驗し、自己依存的となり自主獨立的となり行くのである。¹⁾

これと異なつて農業的生産物は生物である。即ち家畜は勿論植物も皆生命を有するものである。生命を有する物はこれを分析し構成して作ることが出来ない。その生命はその各の種子より

1) Hegel Rechtsphilosophie §204.

これを育て上げねばならぬ。而して生命は生命に對する愛護の精神によつてのみ成長する。而もその國土の地勢氣候等の一切の自然條件との密接なる聯關に於て配慮されなければならない。かくて農業的勞働は分析的機械的ではなく綜合的、人間的である。更に自然依存的であり自然融和的である。かくて農業的富及び勞働は常に本質的に空間的であるがこれに對してその國土の自然と密接な聯關に結ばれて居ない工業的富並に勞働は超空間であると云ふことが出来る。かくて工業勞働に於ては人々は本質上個人主義的自由主義者となり、従つてコスモホリンとなるに對し農業勞働に於ては共同的國民的となる。このことは我國の農業に於けるが如く收約的な場合は特にそうである。

かくの如く工業的生産と農業的生産とはその本質を異にするが故にその何れが支配的となるかと云ふことは社會の本質が異なるによつて異なるのである。中世までの服従的共同的な社會に於ては農業が支配であり商工業が壓迫されて居たが、この共同的服従的な社會をつき破つて發展し來れる個人主義的自由主義の精神に立てる市民社會に於ては商工業が支配的である。この市民社會の發展と商工業の發展とは一體をなして居るのであつて、即ち市民社會はそれ自身商工業主義者である。かくて市民社會の下に於ては商工業が久しく農業を壓迫して來つた居るのである。こゝに新に重農主義がとなへられつゝある。

然るにこの壓迫されつゝある農業は市民社會の國民共同體への進展に於て重要な意味を有す

るのである。即ちこの新なる國民共同體に於ては、現代の市民社會に於ける人と人との關係が金錢を通じ物的に結ばれて居る¹⁾とは異なり、直接に國民愛によつて結ばれて居らねばならないのである。然らば市民社會をかゝる國民共同體へ進展せしむべき最も重要な原動力となるところの國民層は農民自體でなければならない。このことは人口の大多數が市民社會の壓迫の下に窮乏せる農民である我國民にとつて特にそうである。この常に生命を愛し國土と密接に結ばれて居る者こそ市民社會の弊を知り眞に國民的生命愛の自覺に高むことが出来る。而して國民主義的自覺を持つた彼等こそこの進展に最大なる功獻をなし得るのである。而もこの國民共同體なるものは嘗ての中世的社會の如き服從統制の社會ではなく、そこに於ては精神的文化の眞の自由の爲めの經濟的基礎が確立されねばならぬのである。かくてこの經濟的基礎に於ては秩序の子である農業と自由の子である工業とが國民主義的立場より眞の統一に齎らされなければならないのである。

こゝに注意すべきことは工業的生産を重んじ農業をも工業化して考へたマルクスが富の時代的發展のみを重んじ超空間的な史觀に立つたに對し現代の重農主義者が嘗ての重農主義者の如くに農業を讚美する餘り復古主義者とならんとすることである。即ち農業的生産物は工業的に生産物に對して生命的なものであり、従つてその生産的勞働は工業的勞働に比して人間的である。而も既に述べたところの經濟的富の本質が物的價值であり従つてその生産的勞働が犠牲的勞働であると云ふことは農業に於てもかはらないのである。我々はマルクスの如くに農業的生産を工業

的生產との差別を輕視してならないと共に更にこれ等經濟的生產の本質を精神的文化的生產一般の本質と比較することを忘れてはならない。既に述べたるが如く眞の人間生活は精神的文化生活にあるのであつて經濟的富並に經濟的生活は要するにこの眞の人間生活に對する手段的富であり手段的生活である。かくて新なる國民共同體の經濟的基礎に於ては農村共同體の國民的連帶を土臺とすると共に工業的生產をも十分に取り入れて國民的生產力を出来るだけ高めこの國民的生產力を國民的必要の爲めに出来るだけ活用し以て國民の文化生活の物的基礎を確立し總ての國民に眞の人間生活必要な時間の餘裕と富とが與へられなければならない。而してこのことが國民的共同意識の強き自覺の下に於てはじめて實現し得べきものなることは前述せしところである。諸種の精神的文化域の眞の自由は、この經濟的基礎の上にこそ眞に確立し得るのである。